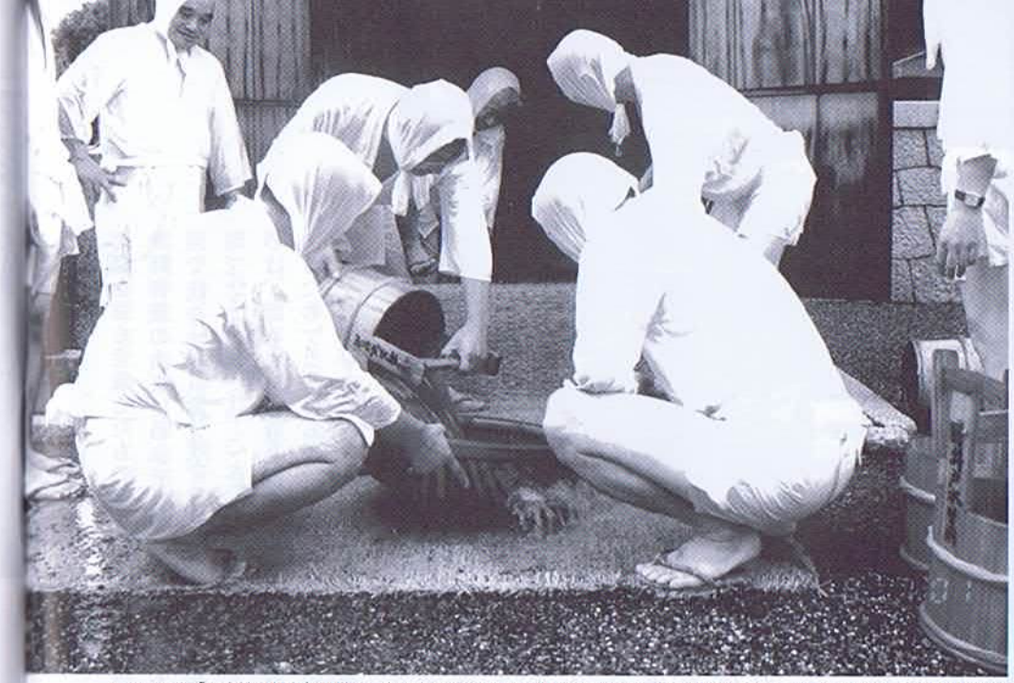
お大師さんは心の拠りどころ
受け継がれる玉泉寺の伝統
玉泉寺（長浜市三川町）

大きな二層の屋根が特徴の玉泉寺。本堂には大師自らが彫ったという木造が安置され、夏に行われる「お水替え行事」は、自他ともに認める「奇祭」。春の涅槃会、秋の灯明祭などの伝統行事も地道に受け継がれている。お大師さんは今も、三川の人たちの心の拠りどころである。



▲かつての「お水替え行事」の様子。白装束で身を固めた当番の人たちが、井戸の水を入れ替える（写真提供／奈須和臣さん）

二重屋根の荘厳な佇まい

玉泉寺の歴史は古く、織田信長の湖北攻めで全焼したのち、元禄13年（1700）に建て替えられたと伝わる。その後も、自然災害で焼失しては再興され、安永9年（1780）の彦根藩主・井伊直幸による改修記録が残り、以降、現在にいたる。最近では、昭和60年（1985）に、老朽化した本堂屋根の葺き替えの落慶法要が行われた。

本堂は、屋根が二重になった「重層伽藍」と呼ばれる珍しい建築様式で、その屋根は、三川に近づけばどこからでも見えるほど、大きくて存在感があり、威厳が際立つ。

年中行事のひとつ「お水替え」は、別名「七日盆」や「水かけ盆」と呼ばれ、境内にある「お大師さんの産湯井戸」の水を入れ替える行事だ。毎年8月7日に行われてきたが、ここ4、5年は大きくは行われていない。

お大師さんを研究する長浜城歴史博物館の福井智英さんによると、この行事の由来は「本堂にお供えする水を1年分ため込んでおくために行われるようになった」、または「その昔、水不足に悩んだ村人たちが井戸から飲み水をもらい、そのお礼として井戸さらえをしたのがはじまり」などと伝わるそうだ。

井戸の水を掛けまわる奇祭

お水替え行事には、境内にある「親井戸」と「子井戸」の二つが使われる。親井戸は4年に1度、子井戸は毎年で、行事を執り行う当番は、三川の集落内から籤で、親井戸は12人、子井戸は8人が選ばれる。

これまでに3回、当番に当たったという饗場さん に話を聞いた。

▲饗場善男さん

▲田中武春さん

◀毎年3月15日に勤められる涅槃会には、色鮮やかな涅槃図が掛けられ、集落の人びとがお参りする。本尊の木造大師像は中央のお厨子に安置されている

「当番は、過去1年間不幸がなく、穢れのない人を集落内からリストアップし、法印さん（玉泉寺住職）がおみくじを引いて選出します。当たった人は、行事前の1週間、精進潔斎に入り、肉や魚などを断って、当日、身を清めて寺に上がるんです」

ニンニクやニラなどの匂いの強い野菜や、「女性」もご法度。さらに興味深いのはキュウリも食べてはいけないということ。これは、キュウリを輪切りにした切り口が玉泉寺の寺紋に似ているから、とか、「お大師さんがキュウリ嫌いだったから」とかいわれるが、定かではない。

親井戸の行事では、水をほとんど汲み出したあと、当番のうちの一人が井戸の底にあるご神体の「竜石」を持ち上げ、ほかの者に見えないようにさらしを巻き、本堂に上げて鎮めた後、元の井戸に戻すのだそうだ。

▲玉泉寺本堂の賽銭箱に表示される粥占いの結果。今年は、大麦、大豆などが「上」と出たようだ

●玉泉寺　長浜市三川町945

井戸の外に蓆を敷き、ザルを置いて、その上に汲み出した水を流していく。そのうちに、どこからか籾が浮かんできて、その数や質で、1年の農作物の作況が占われるという。

「寺では霊籾と呼び、浅井の大吉寺（長浜市野瀬町）から流れてきたということになっています。子どものころは本当に不思議でした」と饗場さん。もちろん、何かしらの「仕掛け」があるのだろうが、それも含めて後世に伝えていきたいものだ。

さらに、汲み出した水は、三川の集落の人々に掛けて回るという、珍しく、楽しい行事へと続く。行事を見守りつつ、家の前まで出てきた人には構わず冷たい水が掛けられるのだが、特に若い女性が狙われるらしい。真夏にさぞ、気持ちいいだろう。

「水で清める」という意味からの風習と思われるが、この水を掛けられた者は夏負けせず、無病息災で過ごせる、といわれている。

饗場さんは「子どものころ、友達同士で示し合わせて、同級生の女の子にいきなり水を掛けるなんていうイタズラもしました。楽しかったですね～」と当時を懐かしみ、目を細めた。

お大師さんのおかげ

玉泉寺には檀家がない。三川の集落は現在123軒。天台宗寺院の玉泉寺だが、どんな宗教宗派でも、「三川の者皆がお大師さんの信徒」だという。お大師さんのおかげで、三川では悪いことが起きない、いつも守られている、という安心感が、三川の人の胸にはある。

昭和60年の改修で、当時総工費1億円ものほとんどが、地元民の寄付で賄われたことからも、お大師さん信仰の篤さがうかがえる。また、毎年1月15日に発表される「粥占い」というおみくじによる1年間の作況判断が今も続いていることや、おみくじで方位の吉凶などを占ってもらう「おうかがい」という風習からも、お大師さんを頼りにしている気持ちがひしひしと伝わってくる。

饗場さんも、「物置を建てるのにも方角や時期を聞いている」そうだし、今年、玉泉寺の世話方を務めている田中武春さんは「親族の縁談前におうかがいをしました。村の人はたいがい、何かしらお世話になっているのでは…。気の持ちようだと思いますが、お大師さんが人間の迷いを正しい方へ導いてくれるような気がします」と言い、おうかがいの通りにして、悪くなったことはないと断言する。饗場さんは、「田中さんの親族は、おうかがいのお蔭で出世してはる」と笑った。

古くから変わらず人々を見守るお大師さん、そして迷いを解く占いとおみくじ。お大師さんという心の拠りどころがいつもそばにある三川の人々が、少し羨ましくなった。（千）

■おもな参考文献
「お大師さん通信」（長浜城歴史博物館・福井智英）
「虎姫のむかし話」（虎姫町教育委員会）
「とらひめ　見たり聞いたりためしたり」

元三大師が「おみくじの元祖」といわれるワケ

ガチャガチャと箱を振って出てきた番号を告げると、手渡される一枚の紙。そこに印刷された吉凶に一喜一憂！　そんなおみくじには、キャラクターやご当地グッズを利用したもの、インターネットで引けるものも登場しているが、本来、おみくじとは、どんなものだったのだろう。そして、元三大師との関係は…？

ルーツとなった観音御籤

おみくじを引いたとき、あなたがまず注目するのは「大吉」「小吉」などの吉凶だろう。続いて「待ち人」「金運」「仕事運」など気になる項目の占いを読み、良いことは当たりますように…、不運な暗示は起死回生を…と、それぞれの思いを託して小枝に結びつける…。そんな人が多いだろう。

でも、おみくじの紙―籤紙（せんし）という―を折りたたむ前に、もう一度よく見てほしい。そこには、現代文での解説だけでなく、和歌やことわざが書かれていたり、むずかしい漢詩が並んでいたりする。このうち、五言四句の漢詩が書かれたおみくじを「元三大師御籤（がんざんだいしみくじ）」という。そして、何やらめんどくさそうな漢詩こそおみくじのルーツ！　そこに吉凶を判断する手がかりが示されているのだ。

▲写真1　元三大師御籤の解説本『元三大師御籤諸鈔』。御籤箱などのサイズや、おみくじを引くのに適さない時間帯も記されている

といっても、元三大師がこれを作ったわけではない。中国から日本に入ってきた「天竺霊籤（てんじくれいせん）」が基になっている。では、なぜ「元三大師御籤」というようになったのだろう。

大師の没後およそ600年後の江戸時代初期のこと、大師に深く帰依していた天台宗の僧・天海（1536～1643）の夢枕に、元三大師が現れてこう告げたという。

「信州戸隠山明神の神前に霊験あらたかな御籤がある。それを我が像の前に置いて占えば、人びとの禍福吉凶を知ることができるだろう」と。果たして戸隠山には、五言四句の漢詩が書かれた御籤100枚が納められていた。

この御籤は「観音籤」とも呼ばれるものだった。また、元三大師は如意輪観音の化身とされ、当時、お大師さん信仰が広く庶民に浸透していた。そんな背景のなかで、御籤（観音籤）は、天海によって「元三大師のお告げによるもの」として広められたようだ。

少し回りくどいけれど、このような経緯で「元三大師はおみくじの元祖」といわれるようになったとされる。

表1

	人の一生	季節	月（1句を7日半）
一句目	生まれてから15歳	春	1日～8日
二句目	16～30歳	夏	8～15日
三句目	31～45歳	秋	16～23日
四句目	46～60歳	冬	23～月末
	106歳～		

表2

吉凶	御籤の数
大吉	17
吉	36
半吉	7
小吉	5
末吉	3
末小吉	2
凶	30
〔合計〕	100

長浜の独創的なまちづくりと共に歩む
長浜デザイン工房(株)元氣や
TEL 0749-63-3746
種子島（鉄砲）のご縁で生まれた長浜の味
湖北長浜の味づくり
芋平
長浜店　長浜市元浜町8-19　TEL.0749-65-5546
大手門店　長浜市元浜町6-17　TEL.0749-65-5544
福
長浜市大宮町4-13　TEL.0749-63-3746

おみくじを正式に引くには…

写真1は、元三大師御籤の解説本として、今も多くの社寺が参考にしているという『元三大師御籤諸鈔（しょうしょう）』（以下「諸鈔」）。江戸時代に作られて以降、版を重ねている。「乾（けん）」には、おみくじの引き方や、第一から第百までの籤の吉凶、解説（和解（わけ））などが挿し絵付きで記され、「坤（こん）」には、それぞれの札の解説がさらに詳しく述べられている。

写真2は、明治時代に発行された諸鈔。解説は変体仮名で書かれ、丁寧に描き込まれた挿し絵が付いている。**写真3**は、大正5年に発行（昭和39年改版。発行／興文堂）されたものだ。占いの結果や漢詩、和解はまったく同じだが、時代や発行元によってその解釈の仕方が異なり、挿し絵もまったく違うイメージで表現されているところが興味深い。

諸鈔では、御籤箱の寸法を天地の面は4寸四方の正方形、丈は1尺と指定し、書付は「大慈大悲観世音菩薩」または「元三大師」とも書くべし、御籤竹のサイズは長さ6寸6分、幅3分、厚さ5厘と、厳密に規格しているほか、おみくじを引くのに適さない時間帯も記している。

▲写真2　明治時代に発行された『元三大師御籤諸鈔』。変体仮名が読める人は少ないかも…

▲写真3　大正5年発行（昭和39年改版）のもの。文面すっきり、挿し絵もあっさり気味

さて、正しい方法でおみくじを引きたいと思ったあなたには、まずこれを読んでいただこう。

「御籤を取ろうと思うものは、まず、身を清めて、手を洗い、口を漱ぎ、香を焚いて、観世音を念じ、法華普門品三巻を読誦し、次に正観音十一面千手如意輪などの呪（じゅ）、おのおの三百三十三回、礼拝三十三度し、そうして御籤の箱を取って三度頂戴し、願文を読み、そのことを念じて箱より振り出すべし。身と心ひとつにして、少しも他念をまじえず、疑いをおこしてはならない。いささかでも疑いの心があれば、御籤はあわず深くつつしむべし」

思わず目を疑うような文言が並ぶ。「法華普門品三巻」「正観音十一面千手如意輪などの呪」…って？　それを333回！　こんなこと普通の人にはできっこない。実は、くじを引くのはあなた自身ではなく、お寺のお坊さん。お坊さんは、悩みごとを抱えた人から、まずその事情を聞く。それから、ここに書かれているような手順を踏み、お大師さまからのお言葉をいただくため御籤箱を振るわけだ。出てきた番付と吉凶を見定めた後も儀式は続く。

「凶」の数は約3割！

ようようくじを引くことができた。そこには番号と吉凶の判断、五言四句とその意味や詳細が記されている。お坊さんは、それをあなたに解説してくださるだろう。

五言四句の見方は、**表1**のように、人の一生、1年の吉凶、1ヶ月の吉凶などに当てはめて判断する。また、句のなかの「日、陽、春、夏、花」などは男性を、「月、陰、秋、冬、夜」などは女性のことをあらわすとされる。

気になる吉凶の割合はというと、なんと「凶」の数は100枚のうちの30。脅威の3割バッターだ。しかし案ずることなかれ。大吉と吉の合計は53と、半数以上を占めている（**表2**）。

諸鈔には、たとえ凶を引いてもよく慎めば吉となり、反対に吉も変じて凶となるわけだから、和解にこだわらなくてもいいよ、臨機応変に判断すべし、とも書かれている。大がかりな占い方にしては、ちょっと気の抜けるような…。いや、迷う人びとを追いつめないための配慮、と読むべきだろうか。今度、五言四句のおみくじを引いたなら、ぜひ、じっくり文字を追って、元三大師のお告げを受け取っていただきたい。

（らん）

■おもな参考文献

『元三大師御籤本の研究　―おみくじを読み解く―』（大野出　思文閣出版）